

近代家族における社会的地位付与の 機能の衰退に関する一考察

—主として生活様式からのアプローチ—

宮 野 直 子

1

家族は、最も古くから存在してきた社会集団として、確固とした地位を社会のなかで保持しつづけてきたが、近代社会の進展につれて、その地位を消失しつつあるといわれるようになってきた。これを家族機能よりみれば、前近代社会の家族は、性的統制、増殖、子の扶養、社会化という本来的機能はいうにおよばず、経済的、保護的、宗教的、娯乐的、教育的、社会的地位付与などの派生的諸機能を有して、強力な社会集団として社会に対して種々の貢献をはたし、またその結果、家族内の結合は強靱となり、社会の成員にとって家族をはなれて生活することは、ほとんど不可能に近く思わしめたほどであった。しかるに近代社会の成立・発展にしたがい、社会分化の影響は、容赦もなく家族集団へも浸入し、その経済的機能は工場や他の産業施設のためにその生産的機能を吸収され、保護的機能、たとえば老人の保護は公私の養老施設に、あるいは病人の保護は病院へ移行し、また宗教的機能は教会や寺院に、教育的機能は学校や他の教育施設に、娯乐的機能は商業主義的娯楽施設に奪われ、家族機能は、本来的機能のみをのこし、年を追って減弱して来たというのである。このような家族機能衰退説は、今日では一般の通説とされるようになってきた。私はこの説には若干の疑問を持つのであるが、ここでは主として家族の派生的機能の一つである社会的地位付与の機能の衰退に関して検討を加えたいと思うの

である。

まず家族の社会的地位付与の機能とは、どのような機能を意味するのであるか。前近代的家族の存在していた封建社会の構造は、身分制度のためにきわめて閉鎖的・固定的であり、社会における個人の地位は、その所属する家族の社会的地位によって決定されていた。たとえば、家老の家柄に生まれた長男は、よほどの障碍のないかぎり父のその地位を世襲することができたのであった。すなわちある一定の社会的地位を有する家族での出生という事実に基づいて、子の成人してのちの社会的地位は、大体その家父長と同様のものが自然必然的に付与されたのであった。所謂リントンの帰属的地位 (ascribed status) が子にあたえられるのである。²⁾ところが社会分化の発展により多数の社会集団の錯綜は、結局個人主義的傾向を生ぜしめ、その結果、社会は開放的流動的となり、専ら個人に重点がおかれるようになってきたのである。近代社会においては、家族の社会的地位は、子に対してその成長後には、もはやまったく影響をあたえず、子の社会的地位は個人的な才能と努力によって獲得される。したがって子の成人してのちの社会的地位は、むしろ業績的にあたえられる獲得的地位 (achieved status) となってくる傾向を生じた。たとえば父が一介の農夫である家庭に出生した子は、その才能と努力しただいで、一国の宰相となることが近代社会においては可能であり、それ故近代家族の社会的地位付与の機能は、減退し、なんらの社会的役割も果すことができなくなったというのである。

なるほど近代家族における父と子の職業における同職率や世襲率は、低下の傾向をしめし、あるいは近代社会の経済的変動は、家族の収入や財産を不安定なものとし、家族の社会的地位付与の機能を現実的にきわめて弱体化せしめた感がある。しかし他の局面である家族のしめる社会的階層のもつ生活様式からみた時、そこにはいまだ多分の疑問があり、一挙にこの家族の社会的地位付与の機能の衰退を断定することはできないのではなかろうかと私は考えるのである。以下いささかこの問題について説明することとする。

まず、ここで使用する近代家族と家族機能の概念について、一応の定義をのべておこう。近代家族とは、その家族構成においては、夫婦と未婚の子女とからなり、近代社会の中に存在するものをいう。つぎに家族機能とは何か。機能(function)については、いまだ確定した定義がなく、したがって比較的不明瞭な概念であるが、活動とか作用を意味したり³⁾、あるいはあるもの(変数)とあるもの(変数)との函数的な関係の意味で使用されている。しかしここではラドクリフ・ブラウンの定義にしたがい、社会的役割、あるいは社会的貢献と解したい⁴⁾。すなわち家族機能とは、社会の構成部分としての家族に適した活動、いかえれば家族が全体社会に果たす役割、あるいは貢献ということになる。

さて上にのべたように近代社会は、個人に重点を置いた開放的・平等の社会であるから、家族の社会的地位付与の機能は、それ故に衰退したのであろうか。まず第一に考えられることは、近代社会が果して純粹の個人のみを単位とした社会とは断言できぬことである。いかに社会変動により封建社会の身分制度的階級が崩壊したとはいえ、全くの無階級社会であるとはい切ることができないであろう。資本主義的経済社会として近代社会をみれば、資本家階級と労働者階級という二階級の存在は否定しがたいけれども、しかしここでは、近代社会において人々がしめる上下関係に注目して社会階層の概念を用いることにしたい。社会的地位の高さは、人々が所属する社会階層の高低とほぼ同義に解されてもよいと考えられる。では階層とは何であろうか。社会の各成員は、その役割に応じてそれぞれの社会的地位を有し、それを基準として社会生活の場面において上下の序列関係に配置されているのであるが、このような意味での社会的地位をほぼ等しくする人口部分を階層⁵⁾ということができよう。歴史にあらわれた具体的階層の例をあげれば、カースト、身分集団、近代的階級などがある。まずカーストとは、人種差または種族差の生得的条件が社会的地位の差

の根拠となっているものである。つぎに身分集団は、主として職業の種類の違いを根拠とする階層形態で、職業の違いによって収入や財産にも差があるが、服装その他の外見や生活様式における差異が顕著である。身分集団の例は、わが国の封建社会における士農工商の別や、中世のヨーロッパにおける身分階層別があげられる。封建家族の地位付与の機能が明確に行なわれたのは、この身分集団の存在する社会のなかであり、この階層組織と密接な関連があるのである。最後に近代的階級とは、近代社会特有のもので、近代社会の成員を職業および収入、財産、生活様式などをもととする社会的威信の大小によって形成された上層、中間、下層の区別をされたものである。近代家族の社会的地位付与の機能が減退したといわれる社会は、このような近代的階級を背景としているのである。さて社会的地位を決定する要因としては、階級の上下関係を決定するものとはほぼ同様の種類のものと考えられ、職業、家柄、学歴、収入、財産、所属団体における発言権、生活様式などがあげられる^の。そしてこれらは、相関しあって社会的地位を決定しているから、理想としては、これら諸要因の高さの総合的判断が必要とされるのである。しかし今ここでこれらの全部の決定要因についてのべることは、この小論においては不可能であるから、私は主として生活様式の次元から近代家族の地位付与の機能をみることにしよう。

3

社会的地位の決定要因の一つである生活様式から、近代家族の地位付与の機能を考察する前に、順序として近代社会の上層、中間、下層の各階級は、どのような生活様式の特質を持っているか、そしてそれは、次代の階級の成員となる子供の発達にどのような影響をあたえているかを一応概観しておく必要がある。

さて生活様式とは、ウィッスラーの規定するところによれば、衣食住のような基本的な生活の仕方や、それと関連する観念や理想などには各集団によって明確な差異が発見され、かくの如き特定の集団の成員として人々が営んでい

る生活の全般⁷⁾を意味する。着物の着方、食事の仕方、住宅における住み方、言葉づかい、作法、家族内の連帯、社会的活動、さらに法律、芸術、信仰など、それは広範囲の人間の行動様式や思考様式を含んでいる。しかもこれらは、一集団ごとに共通のタイプを表示しているものである。したがって上述の各階級ごとに、生活様式は身分集団のように、その差異は明確でないにしてもその独自の差異を示している。私が生活様式の全ての種類から、この相異をのべることは不可能であるから、次の三項目、(1)家族生活の環境、(2)家族連帯のあり方、(3)家族の社会的活動、から各階級内におけるそれぞれの差異を説明し、あわせてそれが、子供にどのように伝承されるかをみることにしよう。

(1) 家族生活の環境

家族生活の環境、とりわけその物的環境は、各階級内によって差異があり、子供の養育もその影響を受けて、それぞれ異質的であることを示そう。

上層階級の子供達は、物的環境、すなわち住宅や家庭内の設備において恵まれている。住宅の外観は、立派であるし、内部もよく整備され、勉強部屋、寝室は家族内の子供達によってそれぞれ所有され、快適な生活を家族成員は営むことができる。また住宅は、先祖伝来のものが多く、ほとんど移動しない。したがって子供に精神的安定をあたえる。召使いや他の家庭労働を軽減する器械や設備は、両親や子に余暇をあたえ、子供は両親によって、直接または間接に十分に養育され、この階級の作法、儀礼などを修得するよう訓練される。さらに多くの豊富な娯楽用品や趣味の設備は子供の生活を組織づけることができよう。宏壮な邸宅は、隣人からの騒音に妨害されることなく、孤立した環境において子供は、各自の才能を伸長することができる。

中間階級においては、上層階級と比較し、上層階級のように住宅、設備、その他のものにおいて豊富で充分ではない。しかし経済的生活に不安はない。ただこの階級では住宅と店舗とが併用されている場合や、父の職業的活動が住居の一部で行なわれている時には、子供がたえず家族外の人々の目にさらされ、子供の独特の生活を失なわしめ、あるいは子供に集中力を喪失させる結果とな

ることがある。

下層階級の家庭の物的環境においては、上層階級のそれと対照的である。住宅は外観も内部の設備も貧弱で、大部分は狭い喧騒なアパートとか貸間に住み、子供は自由な遊び場所を持たない。また住所は、しばしば移動することも多く子供に情緒的不安定をあたえる。要するにこの階級の家族は、基本的な生活欲求を充足することが主要な任務とされ、それ以外の家庭の物的環境をととのえる余裕を持たないのである。

(2) 家族の連帯のあり方

家族の連帯のあり方を次の二項目、(A)子供に対する家族の態度。(B)家族成員における連帯、に分けて各階級内の差異を説明しよう。

(A) 子供に対する家族の態度

上層階級における子供に対する家族の態度は、家族の過去や現在の業績に対して子供に誇りを持たせ、また家名や伝統や家族の社会的地位を維持するように子供に期待する。そして子供の人間としての要求は、富や地位にともなう要求に従属せしめられる。親の考えからみれば、この親の期待や要求にしたがうことが、子の幸運となるだろうから親は子に愛情にもとづいた要求であると信じている。しかし実際は子供の幸福を財産や家名や地位との関係からみて子の人格を中心としてはみしていない。この点において親子関係は、相互の要求と期待との矛盾を生じることがあるし、外見上、近代家族でありながら、親子関係においては封建的親子関係の統制を生じることがある。

中間階級における子への家族の態度はどうであろうか。この階級の人々は、家族計画によって子供の数を決定する結果、出生した子供に対して多くの関心がそそがれゆきわたる。まず子は、親の希望の実現者として期待される。とりわけ、親は自分達の一生を通じて獲得できなかった地位への上昇を子にきわめて強く期待するのである。養育に関するこのような特質は、この中間階級が階級構成においてしめる地位から生じてくる。すなわちこの階級に対して下層階級から羨望の眼が向けられ、上層階級からは批判的な挑戦が行なわれる。前

者は中間階級への接近を迫り、後者は拒否する態度をとる。いきおいこの階級の人々は競争的となり、地位の下降を極度におそれる。この階級の人々は、また外貌や自分の行為に対する他人の批判にいちぢるしい関心を持つ。この傾向は子の養育にも反映し、世間一般からは是認されている「よい子」の概念にしたがって子に夜の外出を禁じ、また単独で映画を見に行くことなども抑制して、あらゆる領域において監視し、統制する。さらにこの階級の子は、論理的にすじ道の通った合理的行動を行なうように強調され、合理主義に価値を置くように強えられる。また子の養育に当るのは専ら母であるが、父の協力も大きい。そして子供は、児童心理学や育児学の成果にもとづいて合理的に養育される場合が多いのである。

つぎに下層階級における子に対する家族の態度は、上層階級や中間階級と全く相違している。両親は子に対して、愛情を持たぬという程ではないが、この階級の人々は避妊の知識を持たぬ故に多子家族が多く、加うるに収入も乏しく、家庭内の種々の設備もなく、また子供の養育に充分の関心を持つことができない。そのうえ家族崩壊が多く離婚、遺棄などによって子供の地位はきわめて不安定となる。このような時、子供は大体母によって養育されたり、年少にして自活することも多く、一般に父の協力は乏しい。この階級の子の教育の特色は、まず人に迷惑をかけないこととされる。隣家は壁一重にあり、またアパートの部室は狭く、人々は小範囲のスペースの中で生活しなければならない。したがって子もこの条件に適合するように教育される。デーヴィスとガードナーもこのことについて、ある意味では下層階級においては、子の世界はない。子供達は、幼時より大人として行動するように期待されている。それ故に子供の行動型相は、他の階級の大人のそれとあまり異らないと⁹⁾のべている。この階級では、よく養育された子供は、たとえば人の迷惑になる行為をしている時、大人から注意を受けた場合には、直ちに服従し行動を迅速に中止することである。子供の服従と機敏さを促進する手段として多くの賞讃や、また身体的処罰が行なわれる。

つぎに第二の特性は、子供は、家事や他の仕事の手伝いをするこゝである。使い走り、雑用をすることには早くから責任をとるように子は教えこまれる。この階級の娘は、幼時から母に代って弟妹の世話をし、息子は父とともに労働に従事する。かくて子供達は、目前のなすべき仕事に追われ、両親から子供の個性を引出し、よりよき発達をせしめるような教育的配慮を受けることを到底期待することはできないのである。

(B) 家族成員における連帯

家族の連帯とは、ここでは責極的意味では、家族成員の統一や利益の一致であり、消極的には危急の時には救助を相互に行なうことである。

上層階級の家族結合は、比較的緊密に行なわれる。この階級の人々は、仕事や他の問題について共通の参加があるし、家族の財産や家名や社会的地位の保持に協力しなければならない。また危急時にはそれらは維持し保存されねばならぬ。その場合、子へも同様のことを期待するから家族内の連帯は比較的強力であるといえよう。

中間階級において家族結合は、これに比していちぢるしく任意的・選択的である。¹⁰⁾この階級の人々は共通した関心や利益が割合に乏しく、また経済的にも安定しているから危急時の相互扶助を行なう必要度も比較的まれであるために、家族内の結合度は、他の二階級より低いのである。

下層階級の家族の結合は、まず第一に危急の場合の協力がもっとも著しく現われる。経済的に不安定であるから、生活の基礎的なもの、すなわち食物、住居が失われた時、あるいは病気の場合、家族は、そのよき避難所となり、家族成員は相互扶助を行なう。第二に家族紐帯は、上述のごとく女系的であり、とりわけ母と子の関係は深い。第三には個人よりむしろ家族集団が重視され、窮乏の場合においては、幼児といえども労働を課せられ協力を強いられる場合もあるのである。

(3) 家族の社会的活動

各階級の特質は、子の社会的活動や社会的参加においてもよくうかがうこと

ができる。

上層階級の子の社会的活動は、スポーツとかゲームなど広範囲に行なわれる。これらの活動に関する顕著な特質は、他の階級との分離である。子供達は、夏のキャンプ、海水浴、旅行に出かけるが、それはほとんど自分自身と同類の階級の子供とである。共通の利害、共通の伝統を持つ者以外の人々には、この階級の人々は、排他的態度をとるのが一般的傾向である。ボツサードによれば、人は社会的規模において、より高く上昇すればするほどますます社会的距離は、地理的距離によって増強されるとのべている¹¹⁾。上層階級の子供は、宏壮な邸宅に居住するために子供の周囲のスペースも広い。また住宅の所在地は、大体類似の階級の住む地域であり、公的交通機関は利用されず、運転手による自家用車による通学やドライブなど生活の全様式が他の階級からの隔離や排他性を示している。このことは、他の階級に対して威信を示すに役立つであろう。

中産階級の子供の社会的活動は、選択的傾向を有している。両親は子のために良友や適切な娯楽を選択し整備する。家族は、子供達に単なる娯楽に熱中するよりも、むしろ目的を持った有益なものを追求し、緊張と努力の態度を望む。したがってこの階級の子供は、科学に興味を持ち、その追求に熱心であるが、これは科学が迅速に変化し、発展する様相が、中産階級の地位における上昇の希望を実現する機会をあたえるからである。

下層階級の社会的活動の特質は、子供が役に立つことである。この階級の親は、経済的にも時間的にも余裕がなく、子供の社会的活動を十分に発達させることもできないし、あるいは子供を粗雑な生活から隔離する能力も持たない。そして経済的窮乏の緩和のために子供にも役に立つ仕事をさせて協力を期待するのである。この階級の人々は、毎日の無味乾燥な生活や、日々の単調な仕事から解放されるために、子供とともに運動会や他の娯楽活動に家族ぐるみで参加する傾向が見られる。

以上において上層、中間、下層のおのおのの社会階級の特質、および子供の養育の状態が各階級によって相違している傾向をみた。もちろんこれは、一般

的叙述であり、個々の家族には例外はもちろんあるであろう。しかし大部分の家族は、子の養育の過程において、家族の所属する階級の生活様式、すなわち階級文化を子に伝承しているのである。

4

以上において、やや類型的にかたむいた見方ではあるが、近代社会における三種類の階級の生活様式の特徴を子供の養育との関連においてのべた。では近代家族の社会的地位付与の機能は、この生活様式からみた場合、全く衰退しているのだろうか。その現状を次に示そう。

まず第一に各階級の生活様式は、養育を通じて子にあたえられたが、この結果、子が成長してからも出生家族と同じ階級への所属を生活様式の局面から容易ならしめることである。ノースも、家族は子供にその階級の地位を伝承する傾向をもち、この傾向は我々が知るように家族の存在そのものに拘束されるとのべている¹²⁾。この存在の内容は、当然生活様式も包含されている。さらにウインチによれば、家族は子供に着物の着方、作法、その地位に適した一般的行動様式のみならず、その家族の属する階級の価値、感情、思想、あるいは道徳のような思考様式を子供にあたえる。これは出生家族の地位付与の機能の基礎的意味であるとのべている¹³⁾。このことは家族の地位付与の機能が、職業や財産などの外的な要素よりもこの生活様式による内的要素の方が、いかに重大な基本的な影響を子にあたえているかを強調しているのである。

このようにしてみれば、生活様式とは、いわば階級の具体的内容をなすものであって、出生家族の所属する階級の内容を子にその扶養の期間を通じてあたえ、それを前提として子に長い生涯を通じて、出生家族と同じ内容的地位をあたえるのである。職業や収入や財産などが、階級の外的形式的決定要因とすれば、生活様式は明らかに内容的実質的要因といえることができよう。そして前者によってあたえられた地位を外的地位とするならば、後者によってあたえられた地位は内容的地位ということになるろう。

さて上述の三つの近代的階級文化は著しい特徴をもっていた。上層階級においては、富、家名、榮譽を中心として、人々はその社会的地位の維持に努力をし、また保守的、懐古的態度が顕著で、他の階級から隔離して威信を表示した。中間階級においては、選択的、競争的態度が取られ、合理性が尊重される。また地位の上昇への志向が、どの階級よりも強調されている。これに対し下層階級は、衣食住に関する基本的欲求の充足のために全精力を消費し、地位の上昇は全く諦観されている。そしてこの階級の生活様式は、この基本的欲求の充足を志向することに集中されている。子の教育年限が最短であることや、児童労働、幼児期よりの家事手伝い、あるいは危急時の家族の強固な運帯などは、その適例であろう。また中間階級が目的合理的態度をとるのに比し、この階級では衝動的態度が顕著で、ただ眼前の事態に即応することのみに重点がおかれている。

このような相異なる生活様式をもったおのおのの社会階級における家族の子供たちは、それぞれの両親や家族成員によって、これらの生活様式にしたがって養育されるのである。

さて元来幼児は、すぐれた可塑性と強い感受性をもって家族の中に生れ、親に向かう子供は丁度、太陽に向かう花のように、その全生活を通じて親の行動様式を吸収しようと全力をつくしているのである。したがって親は、子の最良の模範となることが必要なのである。さらに子の養育に欠かせぬことは、子供に種々の行動様式はいうにおよばず、思考様式にいたるまでたえず努力して強制することによって、これらを自主的に行なわしめることである。たとえば子供が、正しい時間に眠り、または食事をするためには、ある程度の強制を必要とするし、また子供が、服従、静粛であるためにも同様のことが必要なのである。さらに子が成長すれば、その所属する社会や階級の慣習や儀礼、道徳や法律など最初は強制によってこれらを行なわしめるであろうが、しだいに自主的・自発的に行なうことを親は子に期待し、実行させる。家族はしたがって単なる慰安の場所ではなく、その社会学的意義は、ただ子の訓練の場所であるといえよう。この場合子供が親から模倣して学習することや、子供に両親が強制的

に訓練するそれぞれの行動様式は、そのほとんどが両親の所属する階級の生活様式にしたがって大部分行なわれるのであるから、階級の生活様式は、いかに強力に家族内で取扱われ、保存され、永続化されるかは想像できるであろう。幼児の白紙のごとき無垢の状態にこの階級の生活様式は、スタンプをおされ、それは子供が成長してからも終世、これにしたがって無自覚的に行動されるのである。したがって、たとえ出生家族の社会的地位から、その子供が成長したのち上昇したとしても、幼児期に所属していた階級の生活様式を急速に変化せしめることは、きわめて困難なのである。リントンによれば、どんな社会でも、より高い階級に入れて貰おうとするならば、人は、まずその階級のもつ文化型（生活様式）を身につけ、自分の属している階級のそれを捨てなければならない。上層階級の身分を十分に主張できるだけの富を獲得した人も、往々にしてその独持の文化型をうまく身につけることができないとのべている¹⁴⁾。このように中間階級の人々が、たとえ上層階級への上昇を実現したとしても迅速にこの階級の生活様式にしたがって行動することは、きわめて困難である。いわんや思考様式においては、ほとんど変更は不可能に近いであろう。それ故に上層階級の人々が、急激に職業とか財産の獲得によって他の階級から上昇してきた人々に対して「成り上り者」として軽視するということは、たとえば、中間階級の人々が、他の方面から上層階級への所属に可能な資格を得ても、なを自己の階級の生活様式にしたがって、たえず上昇を志向し、競争的、野心的態度をとりつづけ、上層階級の安定したエレガントな態度を急速に修得することの不可能な状態を指摘したものであり、内容的にいまだ上層階級の資格を完全に有していないことを意味しているのである。以上のように家族においては、その所属階級の生活様式を子に伝承し、その結果、子が成長してからも社会において同類の階級の内容的地位を付与し、階級の存続への貢献を近代家族は、封建家族と同様に果しているということができよう。そしてこの意味において近代家族の社会的地位付与の機能は著しく衰退しているとは考えられないのである。

第二に家族の社会的地位付与の機能を生活様式から考察する場合に、当然社

会化 (socialization) との関連をみなければならないことは以上においてすでに明らかであろう。社会化は、家族の本来的機能であって、近代家族も封建家族とともにそのなかでこの機能が作用しているといえよう。これは社会人口の質的向上と文化の伝承という重要な社会的役割を果し、他の社会集団には移行できない家族の重大な機能である。社会化は、動物状態にある新生児の成長に従い、その社会に行なわれている文化を注入し、それを習得せしめて真の意味の人間たらしめる過程を意味する。すなわち人間は、出生時には単なる個人 (individual) であり、それをパーソナリティーを持った人 (person) にするのが社会化の機能である。¹⁵⁾ しかも子のパーソナリティーは、大体5、6才位までに一応形成されることを思えば、社会化の基礎的なものは、その子の家族内において、ほとんど行なわれるといってもよいであろう。社会化は主として道徳的人格形成と、文化の伝承の二方面からなされるから、この文化伝承のなかには当然階級の生活様式も含包されている。それ故に階級の生活様式を通じての家族の地位付与の機能は、この社会化を前提としてこそはじめて可能なのである。そして社会化は、家族の本来的機能であるから、社会に階級が存在するかぎり、生活様式からみた家族の地位付与の機能は、社会化の派生的機能として存続するのである。このような局面から考えれば、近代家族も封建家族も、ともにその社会的地位付与の機能が社会化の派生的機能として存在することにおいて両者は、類似しているといえよう。

最後に近代家族の地位付与の機能の考察について問題となるのは、中間階級における子に対する地位の上昇への熱心な志向ないし態度である。この階級は社会的地位からも、他の二階級の間中に位置し、社会的地位の転落を極度におそれ不安になる。それ故、その反動として地位の上昇にむしろ異様と思えるまでにこの階級の人々は、執着する。その結果親達は、学校教育も地位上昇の手段として考え、¹⁶⁾ また子供のあらゆる社会的活動を選択および、整理し、良き友人と交際せしめ、単なる娯楽よりもむしろ目的をもち、それに対して緊張と努力をおしまないように子を強制して、子の社会的地位の上昇の実現のために全

力をつくすのである。このような状況からみれば、中間階級の子の社会的地位は、たとえ子が親よりもより高い地位を獲得したとしても、それは全く子の個人の才能や能力によって取得された獲得的地位と果して断言できるかどうかということである。もちろん子の能力も必要であろうが、子の社会的地位上昇の背後には、たえざる親や他の家族成員の物的・精神的援助を我々ほうかがうことができるのである。

つぎに中間階級の生活様式が、熱心な地位の上昇に向けられているが、果してそれは、どの程度の上昇が可能であろうかという問題がある。もちろんさきにのべたごとく、生活様式からの地位の変動は一般として考えられないことである。それ故に我々は地位の決定要因の最も有力な客観的要因ともいべき職業から、このことに関して考察を加えておこう。

まずこの例として、アメリカのインディアナポリスで調査された職業移動の研究報告がある¹⁷⁾。そこでは、事務職においての同職率が高く、農業では同職率が低い。では父が農業をしている子はどのような職業へ就職するかをみれば、そのほとんどは、ブルーカラーへ転職し、ホワイトカラーへの就職は、きわめて稀なのである。このことは、アメリカのような社会移動のはげしい国においても、肉体的職業と非肉体的職業との間に障壁が存在することを証明し、その変動の巾はあまり高くないことをしめしていよう。そして一方、ホワイトカラー内部での移動、たとえば、販売、事務のような下級のホワイトカラーから、管理、専門という高級のホワイトカラーへの移動、すなわち小さい巾の移動は、比較的容易であることを示している。

つぎに英国においても、デイヴィット・グラスの「イギリスにおける社会的移動」の調査がある¹⁸⁾。これは3497人の子とその父との職業を、(1)専門的および高級管理的職業、(2)経営的職業、(3)高級事務的職業、(4)低級事務的職業、(5)熟練的職業、(6)半熟練的職業、(7)非熟練的職業、に分類して、この世代間の職業移動をみたものである。これによると父と子の同職率は、全体の36パーセントでやや低いが、隣り合うカテゴリー間で移動したもの、すなわち世代間に

おけるワン・ステップの移動（たとへば父が高級事務的職業であるが、子はワン・ステップ上の経営的職業へ上昇したり、あるいはワン・ステップ下の低級の事務職業へ下降しているもの）を加えると全体の67パーセントになり、さらにツー・ステップの移動をふくめると約88パーセントの高率に達し相接近したところで移動がはげしく行なわれていることを示している。またこの表を頭腦的職業と非肉体的職業と肉体的職業との三分類としてみれば、頭腦的職業と肉体的職業とのあいだの相互の移動は、約12パーセントにすぎない。すなわち、父が肉体的職業でも、子が頭腦的職業になったとか、またはその逆のケースは、きわめてまれで、ここにおいても、その移動は、大巾のステップのものは行なわれず、小さい巾のステップにかぎられていることが証明されている。

これと類似した傾向は、我国都市の近代家族にもあらわれている。私と本学学生とは、主として大阪市内の200家族（いずれも50才以下の夫婦と未婚の子女より構成されたもので、中間階級に属すると考えられるもの）を対象として共同調査を行なった¹⁹⁾。このなかで夫とその父とおよび夫とその妻の父の職業を(1)専門的職業、(2)管理的職業、(3)事務的職業、(4)販売的職業、(5)就練的職業、(6)半熟練的職業、(7)非熟練的職業、に分類して、職業の相関をみた。これによるとまず夫とその父との同職率は、全体の37パーセントとなり割合に低い。しかしこれに相隣り合うカテゴリー間で移動したもの、すなわち世代間におけるワン・ステップの移動（たとえば父が管理的職業であるが、子（夫）がワン・ステップ下の事務的職業へ下降したり、あるいはワン・ステップ上の専門的職業へ上昇しているもの）を加えると全体の58パーセントとなり、さらに、ツー・ステップの移動をふくめると約70パーセントの高率となる。つぎに夫と、その妻の父との職業の相関においては同職率は、27パーセントの低率であるが、これに隣り合うカテゴリー間での移動すなわちワン・ステップの移動を加えると54パーセント、ツー・ステップの移動をさらに加えると73パーセントにも達し、いずれの場合も大体相接近したところで移動がはげしく行なわれている。このようにしてみれば子（夫）の職業とその父の職業とは、大体類似した程度

のものであり、また妻も夫の職業と同類のものに接近している出生家族から来ていることを我々は認めると同時に近代社会の結婚において、夫婦相互の出生家族が、著しく異質的な階級間や、職業間で行なわれるという一般的通念に疑問をいだかざるを得なかったのである。

つぎに子（夫）とその父の職業を(A)頭脳的職業（専門的職業、管理的職業）(B)非肉体的職業（事務的職業、販売的職業）(C)肉体的職業（熟練的職業、半熟練的職業、非熟練的職業、農業）の三分類としてみれば、頭脳的職業と肉体的職業との相互の移動は、約4パーセントにすぎずイギリスの場合よりはるかに低率である。すなわち父が肉体的職業でも、子が頭脳的職業になったとか、またはその逆のケースはきわめてまれで、ここにおいてもその移動は、大巾のステップは行なわれず、小さい巾のステップにかぎられており頭脳的職業と肉体的職業とのあいだの壁は厚く仕切られていることが確認されたのである。

これらの状況をみれば近代社会の中間階級が、いかに上昇を志しても、その移動の巾は狭少で、大体中間階級内での移動と考えられよう。職業における次元から家族の社会的地位付与の機能をみる時、ここにも同様に家族のしめる社会的地位が基準となっていることを我々は知ることができるのである。

以上の諸点からも近代家族は、個人の自由な活動に重点を置かれ、社会的地位は、個人の業績的活動によって獲得されるから、家族の社会的地位付与の機能は衰退したとは早計に判断しがたいであろう。近代家族においても、その底流には家族がなにほどかの社会の基礎となって活動していることを我々は無視できないのである。

5

近代社会においては、社会分化により無数の社会集団が相錯綜し、それらは家族の多数の機能を吸収し減退せしめた。さらにこれらの集団の交錯は、個人主義の発展を促進し、近代社会を個人に重点をおかしめ、開放的・平等的社会とならしめ、その結果、家族の社会的地位付与の機能を衰退せしめたというの

であった。しかし現実に近代社会をみれば、まったく自由で平等な個人単位の開放的社会ではなく、そこには、人々の上下関係にもとづいて形成されている階級の存在を我々は否定しがたい。この階級の地位を決定する要因において職業、収入、財産などを外的要因とするならば、生活様式は内的要因とみることができよう。そして職業などの外的要因によってあたえられる地位に比して、この生活様式より付与される地位は、安定し固定しているといえよう。すなわち上層、中間、下層の各階級は、それぞれ明確な生活様式を持ち、差異を有している。子の養育においても、この階級的持質は、顕著に子に伝承された。伝承された階級文化、すなわち生活様式は、幼児に強い刻印づけを与え、一生を通じてその行動型相や思考様式となり、たとえ子が成人して他の階級へ富や職業などによって移動したとしても、これらの生活様式は早急に変更できないのである。すなわち出生家族は、子に自己の階級の内容的地位を終生付与するのである。このように生活様式からみれば、家族によって子にあたえられるこの内容的地位は、近代家族においても獲得的地位よりむしろ帰属的地位といえよう。そして職業や他の経済的要因によって得られる地位が、個人の才能や努力をある程度必要とするところから一様に近代家族の地位は業績的な獲得的地位であるとして、近代家族の地位付与の機能は、減退していると断言することは、外形的要因のみをみて、この内容的要因を等閑視しているのではなかろうか。

さらにこの生活様式上からの家族の社会的地位付与の機能は、社会化を前提として行なわれているから、階級の存在するかぎり社会化の派生的機能として存続するであろう。また中間階級の地位上昇への志向は、たとえ子が上昇を実現したとしても、その背後に家族成員のたえざる援助があること、また地位の上昇は、職業からみた場合、その移動の中は、比較的狭小で、家族からあまり隔離して行なわれないということが明らかとなった。

以上の諸点から考察されることは、近代社会といえども、家族は依然としてその基礎的な構成単位を社会に占め、家族を基準として社会的地位付与の機能は行なわれているのである。

近代社会における社会移動は、急速な勢いをもって家族機能を減退せしめたといわれている。しかし我々は、職業における同職率や世襲率の低下、経済的要因の変動などに眩惑されて、家族の地位付与の機能の全面的衰退を主張すべきではない。近代家族は、社会階級の生活様式より構成された内容的地位を日々たゆまず静かに次の世代へ付与しつつ、間接的に社会階級の存続にその社会的役割を今もなお果しているのである。 以上

参考文献

- 1) 日本社会学会家族研究部編『戦後における家族の実態』社会学評論 第27・28号 pp. 143~145
- 2) Ralph Linton: The Study of Man, p. 115
- 3) H. Spencer: Principles of Sociology, I, 1920, pp. 450, 485
- 4) A. R. Radcliff-Brown: "On the Concept of Function in Social Science," American Anthropologist, 1935, vol, 37, pp. 395~396
- 5) 尾高邦雄編『職業と階層』 p. 185
- 6) *ibid.*, p. 53
- 7) Clark Wissler: Man and Culture, pp. 1~4
- 8) James H. S. Bossard: The Sociology of Child Development, p. 333
- 9) Allison Davis, B. B. Gardner and Mary R. Gardner: Deep South, p. 129
- 10) J. H. S. Bossard: *op. cit.*, p. 337
- 11) *ibid.*, p. 341
- 12) C. C. North: Social Differentiation pp. 257~258
- 13) Robert F. Winch: The Modern Family, pp. 96~97
- 14) R. Linton: The Cultural Background of Personality, p. 61
- 15) Robert. E. Park and E. W. Burgess: Introduction to the Science of Sociology, p. 55
- 16) J. H. S. Bossard: *op. cit.*, p. 338
- 17) 尾高邦雄編: *op. cit.*, p. 129
- 18) *ibid.*, p. 131
- 19) 昭和38年8月, 本学学生, 足立倫子, 峯美由紀, 田中晶子, 魚谷優子との共同調査による『近代家族機能の衰退説に関する再検討』中
これは大阪市住吉市営住宅(アパート)の70家族, 豊中市公団住宅(アパート)30家族と一般住宅に住む大阪市内在住の100家族, 合計200家族を質問紙を用いた面接調査法と配布調査法との併用によつて行なわれたものである。